

## 倫理 第5回「ギリシャ思想② ソクラテスとプラトン」

○今回のポイント

ソクラテスは「真理の認識」を提唱し、弟子のプラトンは「イデア論」でこたえをだした。

2編1章③真の知への道 - [① ソクラテス] (教科書 p.26~)

哲学的出発点 無知の知

デルフォイの神託「ソクラテス以上に知恵のあるものはいない」



賢者たちと問答。相手は知らないのに何かを知っていると思っている。自分は知らないと思っている。



[② 無知の知]…自分の無知を自覚しているという点で、自分は他人よりも優れている。



「③ 汝自身を知れ」 → 人間としてのあるべき生き方は、自己の無知を自覚し、無知であるからこそ知を愛し求めることにある。

問答法とエイロネイア

[④ エイロネイア] (皮肉)…自分が無知であるかのようにふるまい、反対に相手の無知をさらけ出させる。



[⑤ 問答法] (助産術・産婆術)…問答を繰り返すことによって、相手に無知を自覚させ、思索を深めさせて真の知にいたらしめた。



知を外から教え込むことは出来ず、知を教えるのではない。相手が自ら知を深めていく事の手助けができるだけである。

真の知とは何か

○あらゆるものには「固有の役割」がある → その役割を果たすのに要求される能力・資質がアレテー

○人間としてのアレテーは「徳」 = 「⑥ 魂への配慮」…魂(プシュケー)を良いものにする事。

⊖魂の本質は理性→⊖理性が固有の機能を果たせば魂は良くなる→⊖理性の機能は真理を知ること

→⊕魂を良くするには真理を愛し求めればよい。

[⑦ 知徳合一]…魂のそなえるべき徳が何かを知れば、徳についての知識に基づき正しい生き方へ導かれる。

[⑧ 知行合一]…真の知とは必ず実践へと向かうので、現実の行為と一体のものであるということ。

[⑨ 福德一致]…徳をもつことがよく生きることであり、幸福であるという考え方。

ソクラテスの死

○「国家の認める神々を認めず、新しい神を信じ、青年たちを腐敗・墮落させた者」として告発される。

・裁判では命乞いをせず、市民の道徳的墮落を厳しく批判 → 死刑判決 → 亡命せず毒杯を仰ぎ刑死

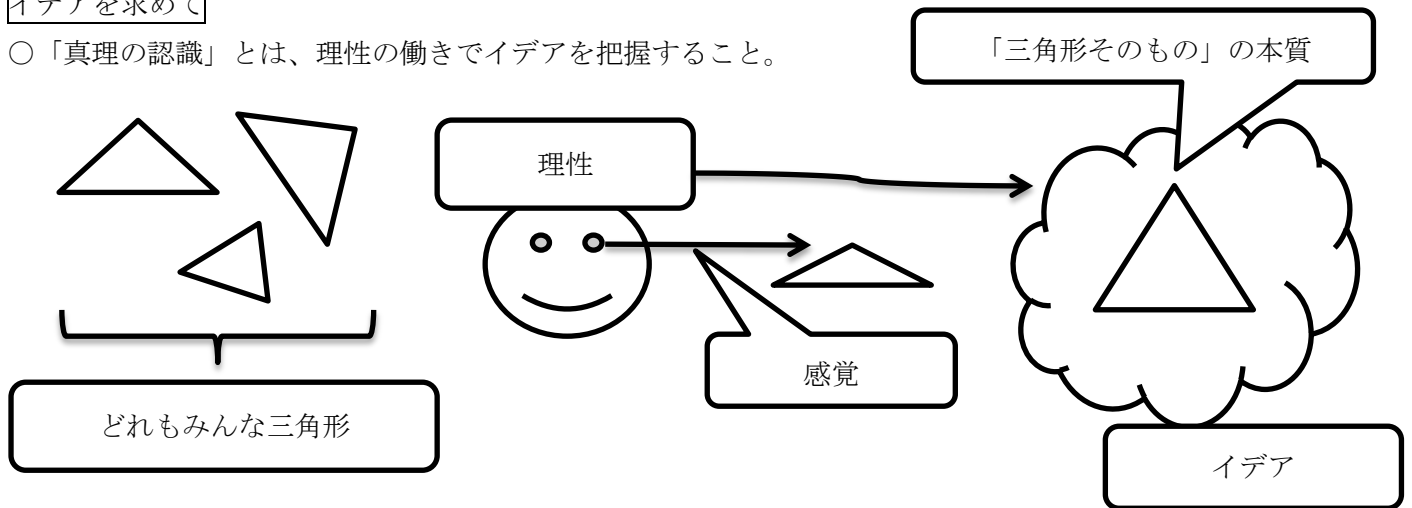


☆「⑩ ただ生きるということではなく、よく生きること」

→ソクラテスにとっては、国法に背いて脱獄するよりも、国法に従って死ぬことが正義であり正しい生き方であった。

アイデアを求めて

○「真理の認識」とは、理性の働きでアイデアを把握すること。



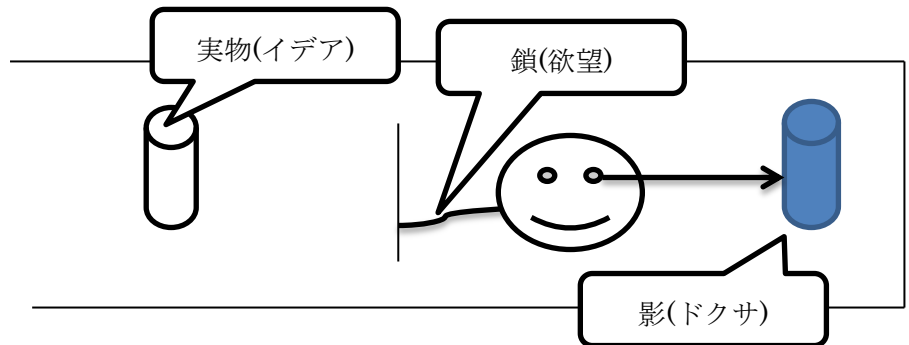
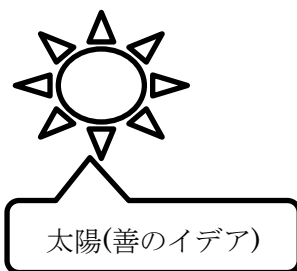
○[⑫ アイデア ]

- ・理性によってのみとらえられる。事物・価値の理想的な原型
- ・個々の事物が存する感覚的世界(現象界)を超えたアイデア界(叡智界)に存在する。
- ・アイデアを認識することが、学問の目的。
- ・[⑬ 善のアイデア ]…様々なアイデアの中の最高のアイデア。アイデア界に君臨するアイデアの中のアイデア

エロースとアナムネーシス

○[⑭ 二元論的世界観 ]…世界を感覚でとらえられる現象界と、理性でとらえられるアイデア界とに分けて認識する。

☆洞窟の比喩と太陽の比喩☆

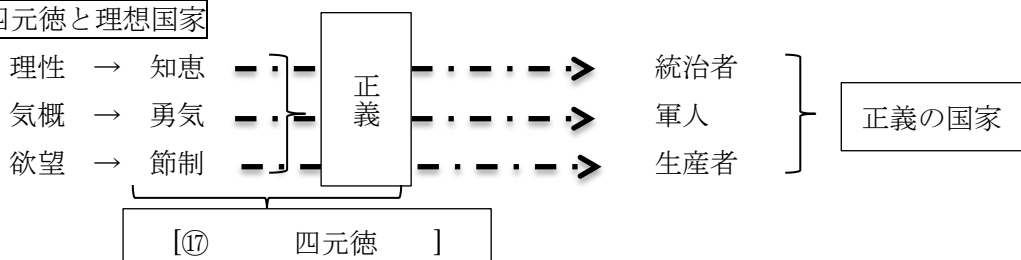


※「善のアイデア」を認識するには、肉体という牢獄にとらわれ、感覚に妨げられて、その本来のはたらきを發揮することができないでいるソグソグの魂を解放しなければならない。

○[⑮ アナムネーシス ]…現象界で真善美に触れると忘れていたアイデア界を魂が思い起こすこと。

○[⑯ エロース ] …人間の魂がアイデア界に憧れ知ろうとする熱愛。アイデアを思慕し想起する魂の原動力。

四元徳と理想国家



[⑱ 理想国家 ]…哲学者が統治者となるか、統治者が哲学者となる[⑲ 哲人政治 ]。知恵の徳にすぐれ、善のアイデアを認識できる哲人が国を指導するとき、はじめて国家全体の正義が実現され、国民の幸福が保障される。